



Title	「も」の周辺的用法の累加性について
Author(s)	榎原, 実香
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2018, 2017, p. 11-20
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/69873
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「も」の周辺的用法の累加性について

榎原実香

1. はじめに

現代日本語のとりたて詞「も」は、(1)に見られるように基本的にその付加によって他の同類の事態が想定される。本稿ではこれを「も」の「累加性」と呼び、「も」の周辺的用法とされる数量表現や不定語と結びつきその数量を強調するような「も」、また並列する同類の事態が想定されにくいぼかしの「も」では累加性がどのように及ぶのかを明らかにする。

- (1) 累加のとりたてとは、文中のある要素をとりたて、同類のほかのものにその要素を加えるという意味を表すことである。(日本語記述文法研究会編 2009: 19)

2. 「も」の焦点

2.1 焦点の拡張

累加の「も」の累加性がどのように及ぶかを考察したものは、多く存在する。本稿では、「も」の焦点（沼田 2009 他）という概念を援用し考察を進める。

- (2)とりたての焦点とは、とりたての作用域内にある要素で、文脈等の語用論的情報から、他との範例的な対立関係を集約的に表す要素（つまり「自者」）ととらえられる構成素の範囲である。最大の焦点は、作用域と一致する。（沼田 2009: 85 下線は筆者による）

以下の(3a)であれば、「も」は「息子」に直接付加しており、「息子」が「わたし」などと対比されとりたての焦点となるが、(3b)や(4b)では、「も」の焦点は「も」が直接併合した「料金」や「花子」などを越えて適用される。本稿ではそのような現象を「焦点の拡張(propagation of focus)」（青柳 2006 他）と呼ぶ。（山括弧〈〉はとりたてられる焦点の範囲を示す。）

- (3) a. あの医者は、〈〈わたし〉 も〉〈息子〉 もお世話になっている。
b. あの医者は、〈腕もいい〉 が、〈料金も高い〉。(沼田 2009: 69)
(4) a. 〈〈太郎〉 も〉〈花子〉 も就職が決まった。
b. 〈〈太郎も専門学校を卒業し〉、〉〈花子も就職が決まった〉。

2.2 焦点の拡張と語用論

「も」の焦点の拡張に語用論的な解釈が必要だとする Shudo (2002) に従うと、上記の(4a)では「花子(x)」も「太郎」も「就職が決まる」といった性質(F)をもち、(5)のように命題内の要素を用いて「性質 F をもった要素が x の他に存在する」と示すだけでも意味は十分に表示されるが、(4b)では、「太郎」が「就職が決まる」という性質(F)を有していないため、「太郎が専門学校を卒業する」と「花子(x)が就職が決まる」を文脈上含む「～が成長して

進路が決まる」という事態を想定しなければならない。そのため(6)のように「文脈に関連性があり ($R(H(x), C)$)、 F を文脈上必ず伴う ($F(x) \subseteq_c H(x)$) 性質 H 」の介在が必要となる。

(5) MO (x, F)

x is a constituent marked by mo ;

F is a property

Proposition: $F(x)$

Presupposition: $\exists y [y \neq x \& F(y)]$ (Shudo 2002: 4-5)

(6) MO (x, F)

Host Proposition: $F(x)$

Mo-presupposition: $\exists y \exists H [y \neq x \& H(y) \& F(x) \subseteq_c H(x) \& R(H(x), C)]$ (Shudo 2002: 57)

本節では、「も」の周辺的用法の累加性を分析するにあたり、「も」によって指示される焦点 X と想定される同類の要素や事態 Y との関係を(7)のように表す。(7)は、文脈上適切な性質 H によって定められる集合（同類の $[Y_1]$ や $[Y_2]$ をもつ）にとりたてられた集合 X が加わるということを示す。(4b)であれば、(7b)のような表示となる。

(7) a. $H = \{[X], [Y_1], [Y_2], \dots\}$

b. 成長して進路が決まる = $\{[花子が就職が決まる], [太郎が専門学校を卒業する]\}$

2.3 焦点の拡張と作用域

生成文法では、(8)にある要素によって意味作用の及ぶ範囲を「作用域」としている。青柳（2006: 124）は、「一般に、量化詞（quantifier）の作用域（scope）はその c -統御領域と一致する。とりたて詞も一種の量化詞であるから、当然作用域を取る」と述べており、「も」の c -統御領域内にある要素は「も」による累加性が及ぶと考えることができる。

(8) 数量詞（quantifier）や wh 語をはじめとする論理演算子（logical operator）の作用が及びうる領域を作用域と呼ぶ（原口・中村・金子編 2016: 420）

本節では青柳（2006）に従い「も」による累加性、すなわち焦点が及ぶ領域が、「も」の作用域によって説明されるとし、(9)のように「も」によって実際にかかる焦点の範囲を網掛けで表示する。(4b)は、(9b)のように表示される。

(9) a. $[x \text{ (焦点)} \underline{\text{も}} \sim \text{ (焦点)}]$

b. $[_{TP} \underline{\text{花子}} \underline{\text{も}} [_{vP} \text{就職が決まつた}]]$

2.4 「も」の周辺的用法の焦点

上記のように累加の「も」の意味論、語用論、統語論における議論は活発になされてきたが、「も」の周辺的用法に関しては未だ議論の余地がある。「も」の周辺的用法とされる以下の(b)の文はどちらも、「も」が直接併合した要素のみからは「範例的な対立関係を表す

要素」が導かれないことがわかる。また、(c)の文から、数量的表現と結びつく「も」は焦点の拡張が見られないのに対し、ぼかしの「も」は焦点を拡張させると文が容認されやすくなることがわかる。(「#」は語用論的に意図した意味としては容認されないことを示す。)

- (10) a. 学生が 5 人も来た。(数量的表現+「も」)
b. 学生が 〈4 人〉 来た。#学生が 〈5 人〉 も来た。
c. #学生が 〈4 人連絡をくれて〉、〈5 人も来た〉。

- (11) a. 花子ちゃんもお姉さんになったねえ。(ぼかし)
b. # 〈ゆりちゃん〉 がお姉さんになって、〈花子ちゃん〉 もお姉さんになったねえ。
c. 〈ゆりちゃんも卒業した〉 ねえ。〈花子ちゃんもお姉さんになった〉 ねえ。

以上から、累加の「も」をもとにした議論のみでは「も」の周辺的用法の焦点が説明されないことがわかる。本稿では、「も」が生起する構造を精緻化することで、各「も」の焦点領域を明らかにし、「も」の周辺的用法が累加の「も」と関連するものであることを示す。

3. 「も」の作用域各論

3.1 累加の「も」

まず、寺村（1991）でも「基本的な意味」とされている累加の「も」について、焦点の広がり方を観察する。第2節であげた「も」の焦点、焦点の拡張が生じる場合を(7)の表示に従って示す。焦点の拡張が生じない場合、集合は述語によって、焦点の拡張が生じた場合、集合は文脈の中で想定される性質によって決定される傾向にある。

- (12) a. 〈太郎と花子〉 は学生だ。〈次郎〉 も学生だ。
b. 学生 = {*[次郎]*, [太郎], [花子], …}
(13) a. 〈天気が悪くなる〉 〈風が吹いた〉。〈雨も降る〉 だろう。
b. 天気の悪化 = {*[雨が降る]*, [風が吹く], [曇る], …}

沼田・徐（1995）の観察から、累加の「も」は「も」が直接併合（merge）した要素を必ず焦点としなければならないことがわかっており、(9)に従うと、(14b)や(15b)のように表示される。主語の「太郎」にしか焦点がおかれない場合、(15)は容認されない。

- (14) a. 〈花子〉 は切符を買った。〈太郎〉 も切符を買った。
b. [_{TP}[_{DP} 太郎]も][_{vP} 切符を買っ]た]。
(15) a. 〈花子が〉 切符を買った。# 〈太郎は〉 切符も買った。
b. [_{TP}[_{DP} 太郎は] × [_{vP}[_{DP} 切符]も]買っ]た]。

また、榎原（2016）では、焦点の拡張が生じるには、最大投射に「も」が付加した句が

焦点要素を c-統御している必要があることを指摘している。¹

- (16) a. (友人の手助け) ?? 〈太郎に教科書を貸し〉、〈次郎にノートも写させ〉 てあげた。
- b. [vP[PP 次郎に] × [VP[DP[DP ノート]も]写]させ ×]
- c. (友人の手助け) 〈太郎に教科書を貸し〉、〈次郎にもノートを写させ〉 てあげた。
- d. [vP[PP[PP 次郎に]も][VP[DP ノートを]写]させ]
- (17) a. (親の頼みごと) ?? 〈母親が息子に夕食の支度をお願いし〉、〈父親が娘に牛乳も買つてくるよう頼んだ〉。
- b. [CP[TP 父親が[vP 娘に] × [FinP[DP[DP 牛乳]も]買つてくるよう]頼ん]だ ×]]。
- c. (親の頼みごと) 〈母親が息子に夕食の支度をお願いし〉、〈牛乳も、父親が娘に買つてくるよう頼んだ〉。
- d. [CP[DP[DP 牛乳]も]i[TP 父親が[vP 娘に] [FinP t_i 買つてくるよう]頼ん]だ]]。

以上、累加の「も」は「も」が c-統御している要素が焦点でなければならないことから、焦点には「も」の作用域が及ぶこと、「も」をもつ句の作用域の中で焦点の拡張が見られるることを確認した。本節を踏まえ、「も」の周辺的用法がもつ特徴に統語論的な説明を与える。

3.2 数量的表現+「も」

本節では、上記の議論を数量詞・不定語+「も」に適用し考察を行う。数量詞+「も」については澤田（2007）に(18)のような主張が見られ、数量詞は内在的にそれ以下の数量をもっているといえる。(19)の例を(7)に則って示すと、1人から29人までが前提として属する「誘った人数」が集合となり、その集合の中に「30人」が加わったとみることができる。

- (18) 数量詞は、それ自身内在的な序列をもっている。たとえば、「3杯飲んだ」という事態が成立すれば、当然「1杯飲んだ」「2杯飲んだ」という事態が成立しているという含意関係である。（澤田 2007: 41）

- (19) a. 先生は文学部の学生を 〈30人〉 も誘った。
- b. 誘った人数 = {*[30人], [1人], [2人], …*}

¹ (16a)や(17a)が容認されるという指摘も聞くが、これらは以下の(a)の文のように「も」が存在しなくても容認されることから、非文ではない。言及すべき問題は、「も」による焦点の範囲に全要素が入っていないということである。「も」の焦点領域にない要素であっても、以下の(b)の文のように音声的にフォーカスが付された場合、容認されやすくなる。この場合、「も」をもつ句自体も焦点性を帶びなければならないことから、焦点要素は vP 層にある FocP（前田（2013）を参照のこと）の指定部にかき混ぜられ、句は痕跡を c-統御していると考えることができる。

- 1) a. 〈太郎に教科書を貸し〉、〈次郎にノートを写させ〉 てあげた。
- b. 〈太郎に教科書を貸し〉、〈[FocP 次郎に_i ノートも_j [VoiceP t_i [VP t_j 写]させ]]〉 てあげた。
- 2) a. 〈母が息子に夕食の支度をお願いし〉、〈父が娘に牛乳を買つてくるよう頼んだ〉。
- b. 〈母が息子に夕食の支度をお願いし〉、〈[FocP 父が_i 娘に_j 牛乳も_k [VoiceP t_i [VP t_j [FinP [VP t_k 買つ]]] 買つ]]〉 ててくるよう頼んだ〉。

(9)の表記を用いると、「30人」から「も」が離れれば数量を強調する効果がなくなることがわかる。数量を強調したい場合「も」が数量詞に直接付加する必要があり、(14)や(15)で示した累加の「も」の焦点の条件が、数量詞+「も」にも適用されることが明らかである。

(20) a. #先生も学生を〈30人〉誘った。

- b. [TP[DP[DP先生]も][vP学生を30人_x誘つ]た]。
- c. #先生は学生も〈30人〉誘った。
- d. [TP[DP先生は][vP[DP[DP学生]も]30人_x誘つ]た]。
- e. 先生は学生を〈30人〉も誘った。
- f. [TP[DP先生は][vP学生を[FNQ30人]も誘つ]た]。²

一方不定語は、(21)からも明らかのように、それ自体が普遍量化の性質を潜在的にもつ。「どの～も」といった表現であっても、「も」は不定語と結びつくことで、不定語が示す具体的な要素を集合に加えていくことができる。その要素が集合の中に最終的に全て加わることになるため、普遍量化と類似した表現効果をもたらすと考えられる。

(21) 「誰」「何」「どこ」「いつ」などの不定語に直接「も」が付加されると、〔中略〕全部の意味になる。これは「も」によって含意されているある事柄に対する要素を定めることなくその全ての要素を不定語〔中略〕によって指しているため「も」によって含意された対照集合の要素すべてを指すことができるのである。(澤田 2007: 60)

(22) a. 先生は〈どの学部の学生〉も誘った。

- b. 誘った学生 = {I医学部の学生, I工学部の学生, I文学部の学生, …}

(23) a. 先生は文学部の学生を〈何人〉も誘った。

- b. 誘った人数 = {I1人, I2人, I3人, …}

榎原(2017a)に従うと、(24)の場合、不定語と結びつき全称を表す「も」は名詞句の主要部Dに直接付加する。(24a)が容認されないことから、不定語+「も」も累加の「も」と同様、累加対象が「D+も」によってc-統御されていなければならないことがわかる。

(24) a. *先生も〈どの学部の学生を〉誘った。

- b. [TP[DP[DP先生]も][vPどの学部の学生を_x誘つ]た]。
- c. 先生は〈どの学部の学生〉も誘った。(=(22a))
- d. [TP[DP先生は][vP[DPどの学部の学生 D+も]誘つ]た]。

このように、数量的表現+「も」のもつ特質は数量詞や主要部Dなどに直接付加することで機能し、「も」または「D+も」のc-統御領域を作用域とすることが明らかとなつた。

² 「FNQ」とは、遊離数量的数量詞(Floating Numeral Quantifier)を指す。本稿における数量表現のラベルや構造は、Nakanishi(2008)に従う。

3.3 ぼかしの「も」

次に、ぼかしの「も」³の累加性について考察する。ぼかしの「も」は、中尾（2008）に従えば、「も」によって①一般則や②他の解釈を想定させることができるという点で累加性をもつといえる。①のような表現効果を期待した場合、「人は成長する」といった人間の共通認識から、その具体例として、「太郎が年をとる」といった命題が加えられるという解釈が可能となる。また、②のような表現効果を期待した場合は、例えば「太郎の白髪」を見て得られる解釈という集合の中に「太郎が年をとる」といった解釈が加えられ、副次的に「太郎は病気だ」といった「他の解釈」をおわせることにより、婉曲的な表現とすることができるのである。(25d)や(26d)が累加の「も」としてしか解釈されないことから、(6)で示したように、対比される事態がもつ性質が文脈上とりたてられた要素がもつ性質を伴い($F(x) \sqsubseteq H(x)$)、対比される事態を想定するために話し手・聞き手の共有する「前提」が文脈に則したものでなければならない($R(H(x), C)$)ことがわかる。

(25) ① 「人間は成長するものだという一般則」

- a. 〈人は成長する〉〈太郎も年をとった〉ねえ。
- b. 人は成長する = {I[太郎が年をとる], [妹が卒業する], [姪っ子が入学する], …}
- c. 〈太郎の娘が入学した〉ね。〈太郎も年をとった〉ねえ。
- d. 〈花子はいつまでも若々しい〉ね。#〈太郎も年をとった〉ねえ。

(26) ② 「太郎の状況・状態にもとづく解釈」

- a. 〈太郎の白髪が目立つ〉〈太郎も年をとった〉ねえ。
- b. 太郎の白髪に対する解釈 = {I[太郎が年をとる], [太郎は病気だ], [太郎はストレスをためている], …}
- c. 〈太郎が疲れている〉ね。〈太郎も年をとった〉ねえ。
- d. 〈太郎が元気に走っている〉ね。#〈太郎も年をとった〉ねえ。

(25)と(26)における考察から、ぼかしの「も」による焦点は付加対象を越え、累加の「も」と同様焦点の拡張が生じていることが予想される。また(27)より、ぼかしの「も」によってとりたてられるのは動詞句ではなく命題である必要があり、ぼかしの「も」の焦点は、累加の「も」による焦点の拡張よりも広いことがわかる。

(27) a. #太郎は 〈年もとって〉〈腰も曲がった〉ねえ。

- b. 〈太郎も年をとった〉し、〈花子も腰が曲がった〉ねえ。

³ 本稿では、中尾（2008）によって扱われた「も」のうち、解釈にかかるものと一般則にかかるもののみを分析の対象とする。以下のような、典型例表示の「も」や時にかかる「も」に対する分析は統語的生起位置が異なること（榎原（2017b）を参照のこと）から、その詳細な分析は別稿に譲りたい。

3) a. 春もたけなわの今日この頃です。（典型例表示の「も」）
b. そろそろ夏休みも終わる学校が増えています。（時にかかる「も」）

(27)は、「も」の統語的生起位置から説明が可能である。ぼかしの「も」の統語的な特徴として、述部内に生起しないこと（定延 1995 他）や、文末形式と呼応すること（野田 1995 他）が指摘されている。以下の例から、ぼかしの「も」をもつ句は CP 指定部に位置しなければならず、名詞句+「も」が命題(TP)を作用域とすることがわかる。

- (28) a. お前も年を取った#(な)。

- b. [CP[DP お前も][TP[vP 年を取つ]た]な]。
- c. #お前は年も取ったな。
- d. [CP[DP お前は]×[TP[vP[DP 年も]取つ]た]な]。
- e. #お前は年を取りもしたな。
- f. [CP[DP お前は]×[TP[vP[vP 年を取り]も]した]な]。

また、(30a)のようにぼかしの「も」が主語のみをとりたてられないことから、ぼかしの「も」は累加の「も」とは異なり、焦点の拡張が義務的であると考えることができる。

- (29) a. 〈花子が〉年をとった。〈太郎〉も年をとった。（累加）

- b. 〈花子が大学生になった〉。〈太郎も年をとった〉。

- (30) a. 〈花子が〉年をとった。#〈太郎〉も年をとったねえ。（ぼかし）

- b. 〈太郎の背中も小さくなつた〉なあ。〈太郎も年をとつた〉ねえ。

以上より、ぼかしの「も」は CP の指定部に生起し、「も」をもつ句の作用域である命題全てに焦点が拡張することが明らかとなった。

第 3 節では、数量的表現+「も」は数量詞や D に直接付加し、「も」の付加対象を焦点とすること、ぼかしの「も」は CP の指定部に生起し、焦点が「も」をもつ句の c-統御領域に義務的に拡張することをデータから明らかにした。以上の議論を表 1 にまとめる。

表 1 各「も」と焦点の拡張

	焦点の拡張	生起位置
累加	○任意的	vP 内
数量的表現+も	×	vP 内（数量詞・主要部に直接付加）
ぼかし	○義務的	CP 指定部

4. 「も」と作用域

前節では数量的表現+「も」とぼかしの「も」の生起位置、焦点の拡張について記述的な観点から明らかにしたが、本節では、「も」の周辺的用法と累加の「も」との上記のような相違が見られる要因を統語構造でもって説明する。

4.1 「も」の作用域

「も」の作用域が見られる累加の「も」と数量的表現+「も」の構造を概観する。

- (31) a. 〈教授〉が捕まった。〈学生〉も3人捕まった。(累加)

b. [TP[DP[DP 学生]も][vP[FNQ 3 人]捕まつ]た]。

- (32) a. 学生が 〈3人〉も捕まったく。 (数量詞+「も」)

b. [TP[DP 学生が][vP[FNQ 3 人]も捕まつ]た]。

c. 〈何をした学生〉も捕まったく。 (不定語+「も」)

d. [TP[DP[CP 何をした]学生 D+も][vP 捕まつ]]。

累加の「も」と数量的表現+「も」との構造上の違いは、以下のような例文でもって明らかになる。(33b)では、「学生5人」の他に「来た」人が存在することを表す累加の「も」が見られるが、「5人」がゼロ代名詞を伴った名詞句「学生5人」の一部だとすると、「も」はDPに付加する。(33d)のように「5人」を強調する「も」となる場合は、ゼロ代名詞と数量詞が離れ、「も」は「5人」という数量詞に直接付加する。

- (33) a. A: あと5人、学生が来るよね? B: あ、5人も来たよ。

b. [TP[DP[DPPro [FNQ 5 人]]も][vP 来]た]。(累加)

c. A: 学生は何人来たの? B: なんと5人も来たよ。

d. [TP[DP pro][vP[NumP [FNQ 5 人]も]来]た]。(数量詞+「も」)

一般に、(34c)のような数量詞の遊離は、名詞句の移動の過程で数量詞が残留したものだとされている(Nakanishi 2008)。ゆえに、(34d)のようにその移動前にあった構造には、痕跡が残っていると考えることができる。よって「3人も」は名詞句「学生が」の痕跡しかc-統御せず、焦点の拡張が生じないようにみえるのである。不定語+「も」も、「D+も」としてすでに結合てしまっているため、「も」の性質を継承した句を生成させることはできず、作用域も「D+も」のc-統御領域内の「どの学生」にしか及ばない。すなわち、数量的表現+「も」において焦点の拡張が生じた場合、「も」を伴う複合要素が顕在的でない要素しかc-統御できないため、数量的表現+「も」は他の明示的要素まで「焦点が拡張しない」と観察されるのである。(統語的に焦点が拡張される部分を四角で囲む。)

- (34) a. 学生が研究会に行った。(学生が)〈本も買っ〉た。

b. [TP[DP 学生が][vP[DP[DP 本]も]買っ]た]。

c. 学生が事故を起こした。#学生が 〈3人も捕まつ〉 た。

d. [TP[DP 学生 i が][vP[NumP t_i] [FNQ 3 人]も]捕まつ_x]た]。

e. 学生が事故を起こした。〈どの学生も捕まつ〉 た。

f. [TP[DP どの学生] D+も][vP 捕まつ_x]た]。

4.2 「も」をもつ句の作用域

最後に、「も」をもつ句の作用域がかかる累加の「も」とぼかしの「も」を対照する。

- (35) a. (学校全体の不祥事) 〈教授が解雇され〉、〈学生も3人捕まつ〉た。
b. [TP[DP[DP 学生]も][_{vP}3 人捕まつ]た]。
- (36) a. (人は成長する) 〈幸子は大きくなった〉ねえ。〈花子ももう卒業する〉かあ。
b. [CP[DP[DP 花子]も][_{TP} もう卒業する]かあ]。

三井（2001）は、(37a)の例が累加の「も」として解釈されないことからも明らかであるように、ぼかしの「も」が連体節より上の階層で生起することを指摘している。また、(38)のように、同一指示をもつ主語との共起が可能であることからも、ぼかしの「も」は CP 層に基底生成される考えることができる。よって(39)のように、累加の「も」は TP 内に、ぼかしの「も」は CP 層に位置するという構造の違いを示すことができる。

- (37) a. # [CP[FinP[DP お前も][_{vP} 年を取ると]]、親が心配するよ]。
b. [CP[ForceP[DP お前も][FinP[_{vP} 年を取った]]が]、親はもっと年を取っている]。
- (38) a. 太郎もお前はバカだなあ。(ぼかし)
b. [CP[DP 太郎も]i [TP[DP お前は i][_{vP} バカだ]]なあ]。
- (39) a. 太郎もバカだね。
b. [CP[TP[DP[DP 太郎]も][_{vP} バカだ]]ね]。 (累加：太郎以外に「バカ」がいる)
c. [CP[DP 太郎も]i [TP[DP pro_i][_{vP} バカだ]]ね]。 (ぼかし：太郎に対する解釈)

長谷川（2012）によれば、係り結びは統語的には CP 層において指定部に位置する要素と主要部にある文タイプ素性との一致（agreement）である。ぼかしの「も」にも共起しやすい文末形式がある（野田 1995 他）ことから、CP 層において指定部に生起する「も」を伴う句と C 主要部との一致が生じると考えることができる。前述のとおり、「焦点の拡張」は語用論的な解釈を要する。ぼかしの「も」を伴う句が語用論との接点をもつ CP 層で生起する要素と一致すると、語用論的な意味作用、すなわち「焦点の拡張」が義務的に生じると考えることができる。よって、ぼかしの「も」とは、「も」をもつ句が CP 層で C 主要部と一致し、TP まで義務的に意味作用が広がる現象である、と考えることができる。

5. まとめ

以上、数量的表現+「も」は数量詞や D 主要部に直接付加し、「も」が及ぶ作用域が限られること、ぼかしの「も」は「も」をもつ句として CP 層で生起し、CP 層で焦点の拡張が義務的に生じることを示し、どのような「も」であっても累加の「も」と同様に累加性が及ぶことを論じた。従来の「も」の意味体系をこのように示し直すことで、数量的表現+「も」やぼかしの「も」における「意味」の違いを統語構造における「も」のはたらき方の違いとして累加の「も」と一貫した見方ができることを示した。今後は、「も」の周辺的用法を

通じて統語論と語彙論、語用論とのインターフェースを明らかにしていきたい。

参考文献

- 青柳宏 (2006) 『日本語の助詞と機能範疇』 東京：ひつじ書房.
- 榎原実香 (2016) 「とりたて詞「も」の統語論的考察」 修士論文, 大阪大学.
- 榎原実香 (2017a) 「「も」の解釈への統語論的アプローチ—累加と全称を中心に—」 日本言語学会第 155 回大会口頭発表. 立命館大学, 2017 年 11 月 25 日.
- 榎原実香 (2017b) 「モノ周辺的用法の再分類—文の階層構造ととりたての観点から—」 日本語文法学会第 18 回大会口頭発表. 筑波大学, 2017 年 12 月 3 日.
- 原口庄輔・中村捷・金子義明 (編) (2016) 『増補版 チョムスキーリ理論辞典』 東京：研究社.
- 長谷川信子 (2012) 「現代版「係り結び」としてのト条件節構文—CP 構造における従属節と主節の呼応—」『日本語文法』 12(2): 24-42.
- 前田雅子 (2013) 「日本語における Derivational Feature-Based Relativized Minimality」 遠藤喜雄 (編) 『世界に向けた日本語研究』 163-184. 東京：開拓社.
- 益岡隆志・野田尚史・沼田善子 (編) (1995) 『日本語の主題と取り立て』 東京：くろしお出版.
- 三井正孝 (2001) 「モノ〈提題〉性：現代日本語の場合」『日本語と日本文学』 32: 65-79.
- Nakanishi, Kimiko (2008) The syntax and semantics of floating numeral quantifiers. In: Shigeru Miyagawa and Mamoru Saito (eds.) *The Oxford handbook of Japanese linguistics*, 287-319. Oxford: Oxford University Press.
- 中尾有岐 (2008) 「並列事態が想定しにくいモノについて」『日本語文法』 8(1): 36-52.
- 日本語記述文法研究会 (編) (2009) 『現代日本語文法 5 第 9 部とりたて 第 10 部主題』 東京：くろしお出版.
- Nishigauchi, Taisuke (1990) *Quantification in the theory of grammar*. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- 野田尚史 (1995) 「文の階層構造からみた主題ととりたて」 益岡・野田・沼田 (編) (1995), 1-35.
- 沼田善子 (2009) 『現代日本語とりたて詞の研究』 東京：ひつじ書房.
- 沼田善子・徐建敏 (1995) 「とりたて詞「も」のフォーカスとスコープ」 益岡・野田・沼田 (編) (1995), 175-207.
- 定延利之 (1995) 「心的プロセスからみた取り立て詞モ・デモ」 益岡・野田・沼田 (編) (1995), 227-260.
- 澤田美恵子 (2007) 『現代日本語における「とりたて助詞」の研究』 東京：くろしお出版.
- Shudo, Sachiko (2002) *Presupposition and discourse functions of the Japanese particle mo*. New York & London: Routledge.
- 寺村秀夫 (1991) 『日本語のシンタクスと意味 III』 東京：くろしお出版.